

2017年7月23日(日)

説教:「命(神)の息」

聖書:創世記2:4b~17

2章4節bからは、もう一つの天地創造物語である。この物語がまとめられた時期は紀元前10世紀頃といわれる。その時代背景は、イスラエル王国の全盛期、ダビデ王、ソロモン王の時代になる。この時代は、近隣部族、諸国との領地を奪い合う戦争を繰り返して、イスラエルは、勝ち続けることで経済的にも宗教的にも繁栄して行くように見えた。王の権威が増し、序列社会が明確になり、自ずと格差社会が生まれ、身分や財産の格差が生じ、富む者はさらに富、貧しい者はさらに貧しくなる。命の軽視が生まれていく時代であった。宗教的面でいえば、モーセを通して与えられた十戒がこの時代において(律法の)形骸化を見る。王の権力が増せば増すほど、そういう事は起こるもの。

今日の日本の政治も法の形骸化を図ろうとしている。これまで憲法9条があったから自衛隊が海外へ行って戦争に加担することが出来ずにいた。戦争がしたい政治家が総理になると、必ず憲法改正の話が出て来る。しかし中々改正という実行には移せず、断念することを繰り返してきたわけだが。ここに来て安倍政権は、特定秘密保護法、集団的自衛権が行使できるように憲法解釈を力で押し通した。そして共謀罪法も同じく。今や9条は骨抜き同然と化す。私たちはこの問題に直視していかなければならない。

ボンヘッフアー言う。「平和への道は、安全という道の上には存在しない。何故なら、平和は危険を冒して実現されねばならないという、一つの大きな冒険だからである。そして、平和は決して、また永久に自分の安全を保障するものではない。平和と安全とは正反対である。」また一つ問われていきたい。

主なる神は、「命の木」から食べて良いが、「善悪を知る木」からは食べてはいけないと命令する。ここは、十戒、律法を形骸化する状況、王政による国家体制を強化する傲慢な姿勢に対し、善悪の判断は神のものであって、決して王にも、人にも手渡されていないというメッセージがある。

そしてこのことは、教会もまた問われることになる。教会は、命(神)の息が吹き込まれて教会が生まれ、生きた教会としてあるはずだが…。しかし、教会はいつでも形骸化し、骨抜きにされることはあるもの。教会が何を持ってここに立つのか、教会は問われている。教会は、神の息が吹き入れられている。恐れず神と共に歩む教会でありたい。(神谷)